

5 東海道の裏道「岡津道」みち

汲沢小学校と戸塚高校の間の坂道や領家付近の坂道を、土地の人々は「腰ぬけ坂」とよんでいる。罪人が岡津へ引かれて行くとき、このあたりで腰をぬかしたことから、この名がついたということである。

江戸初期、岡津村の鷹匠町に鎌倉郡・高座郡の幕府直轄



岡津道旧道

領（天領）を支配していた代官頭彦坂小刑部元正（成）の陣屋（P140参照）があり、その近くに刑場があったことから、この話が生まれたのであろう。しかし、実際は急坂のため荷物の運搬に苦労したので、そこから「腰ぬけ坂」の名が出たのではないかと思われる。

この道は、岡津道、藤沢道などとよばれる古道で、岡津と藤沢、小田原を結ぶ道であったのだろう。

深谷町の専念寺前、汲沢の中村三叉路を経て、汲沢小学校の校庭の中央を横切り、踊場、戸塚斎場裏を経て領家中学校前を通り、岡津へと通じる尾根道である。

この道の周辺には、島田谷、鳥ヶ谷、後谷、金掘谷、領家谷、九日谷、篠塚谷、観音堂谷、宮ヶ谷など谷のつく地名が多く、道沿いの地形をよく表している。

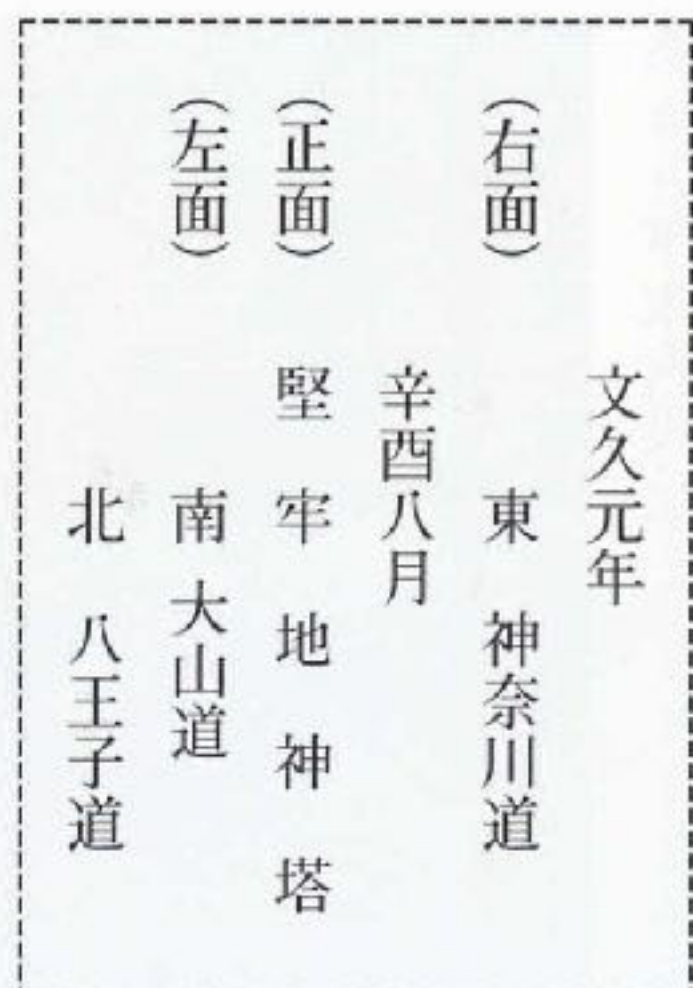
岡津は、鎌倉時代頃に甲斐三郎為成、小田原北条時代には太田大膳亮が支配していた。また、江戸初期の幕府直轄領の頃には、代官頭彦坂小刑部元正（成）の陣屋があり、元和元年（一六一五）には、旗本黒田信濃守直綱の領地となった。このため、この岡津道は古くから政治的にも人々の生活面からも重要な役割をはたしていたと思われる。しかし、住宅等の開発により、昔の面影をとどめているところは少なくなっている。



腰ぬけ坂

6 年貢の道「神奈川道」みち

上飯田町の柳明神社裏の三叉路の角に、神奈川道の道標を兼ねた堅牢地神塔が立っている。皇国地誌に「保土ヶ谷



ヶ谷往還は、道標に刻まれた神奈川道のことである。

神奈川道は、大和市の上和田から境川の下分橋を渡り、横浜市にはいり、鎌倉上の道と合流して北上し、柳明神社横を通り、道標の所で鎌倉上の道と分かれて、東方へ向かい保育園前を通り、和泉町と宮沢町の境の道を経て二俣川、保土ヶ谷へと通じる道である。

宝永四年（一七〇七）の「上飯田村反別差出帳（飯島家文書）」に「この年貢の儀、新町川岸まで四里付きだし、海船に積み、江戸へ相廻す申し候」とあるように、当時上飯田村の年貢は、保土ヶ谷の新町の川岸まで陸路を運び、そ

往還に属す、当村東

北の方瀬谷、和泉両村より通じ斜に経過すること八町十二間にして西の方高座郡上和田へ連なる道敷二間」とある。保土

こから船に乗せて、江戸蔵前まで運んでいたようである。多分、年貢を運んだ道が、この神奈川道であったと考えられる。

当時、神奈川は宿場として、また湊として地域の文化的経済的中心であったので、周辺より神奈川へ通じる道は多く、すべて神奈川道といった。

恩田川南岸と北岸の道、稲毛道、芝生よりの八王子道、三ツ境、二俣川を経て神奈川へ通じる相州道などの道も神奈川道といわれたが、上飯田町を通る道も神奈川道の一つであったと思われる。



神奈川道道標